

延宝三年の歳旦書付

尾崎千佳

一

延宝三年の俳諧歳旦は、井上敏幸「曼殊院蔵『俳諧三ッ物揃』」^{〔注1〕}によって井筒屋庄兵衛刊三ッ物揃が紹介されて以来、当該期の俳壇研究に活用されて久しい、学界周知の資料である。曼殊院本発見当時、延宝三年の三ッ物揃は井筒屋板歳旦刷物の最初期に位置する資料と認識されていたものの、その後、岡田利兵衛・雲英末雄「柿衛文庫蔵『寛文十三年歳旦集』」^{〔注2〕}がこれを二年溯る寛文十三年板歳旦三物の存在を報じるに及んで、さらに古い事例の出現が待望されることとなった。「柿衛文庫蔵『寛文十三年歳旦集』」解題には、次のようにある。

新春の御慶に、宗匠と主だった門人とで発句・脇・第三と三組つらねる歳旦三ッ物は、連歌以来の伝統を持つが、俳諧においては元和元年貞徳と妙蓮寺僧都日源・渋谷以重の三人で行なった歳旦三ッ物が、冠鶏井令徳筆写の書面で遺されており（藤井乙男「貞門俳諧史」改造社版『俳句講座』1）、それがそうしたもののひとつとも古い資料として注目されよう。しかし俳諧師の間で、歳旦三ッ物の板行が一般化するのには寛永後期のことと思わ

れる。阿誰軒の『誹諧書籍目録』には「歳旦集 二冊 近代大三物板行 寛永十六年以來の三物なり」（傍点、筆者。以下同様）とあり、刷りおろされた歳旦帳の存在することを示している。この歳旦帳の出版は、『歴代滑稽伝』（許六著・正徳五年刊）の貞徳の箇所「井筒屋故庄兵衛此の人（貞徳）につかふ。貞徳、命じて三ッ物所に定む」とあるように、京都の書肆井筒屋庄兵衛がほとんど一手に引き受けて行なっていた。いわゆる「京板」なるものがそれである。

これとほぼ同趣旨の論述を含む雲英「歳旦帳・歳旦刷り物について」^{〔注3〕}において、右掲出の傍線部は、「歳旦三ッ物が一般化し、刷りものとして出されるのは寛永後期のこと」と断定されるに至っている。

これらは草創期の歳旦出版をめぐる定説と目されるが、先に拙稿「歳旦書付から歳旦帖へ―近世初期の歳旦をめぐる―」^{〔注4〕}で詳述したように、阿誰軒『誹諧書籍目録』の記事を根拠として、俳諧歳旦の板行が一般化する時期を「寛永後期」とすることはできない。いまま点のみ繰り返せば、『誹諧書籍目録』上の、

歳旦集 ^{二冊} 近代大三物板行 ^{三冊} 庄兵衛板

寛永十六年以来之三物也

との記事が、延宝三年十二月刊『花千句』、同四年正月刊『宗因五百句』のあとに掲出されていることから、逸書『歳旦集』は延宝年間刊行の、「寛永十六年以来之三物」を集成した二冊本であったと考えられる。『誹諧書籍目録』『歳旦集』条の「寛永十六年以来之三物也」との記述はかく解釈すべきであって、これを以て寛永十六年以後の「刷りおろされた歳旦帳の存在」を証するわけにはゆかない。そして、逸書『歳旦集』をめぐるこの推測は、天理図書館縮屋文庫に現存する延宝二年井筒屋板『歳旦発句集』が、寛永十六年から延宝二年にかかる俳諧歳旦発句を編年に整理した書であるという事実とよく符合する。すなわち、『歳旦三物集』『歳旦発句集』はともに、年次の判明する作品としては寛永十六年分を最古の例として収め、以降、延宝初年頃までの歳旦を取り集めた、いわば「初期俳諧歳旦集成」とでも称すべき、井筒屋による一連の企画刊行物であったと思われるのである。

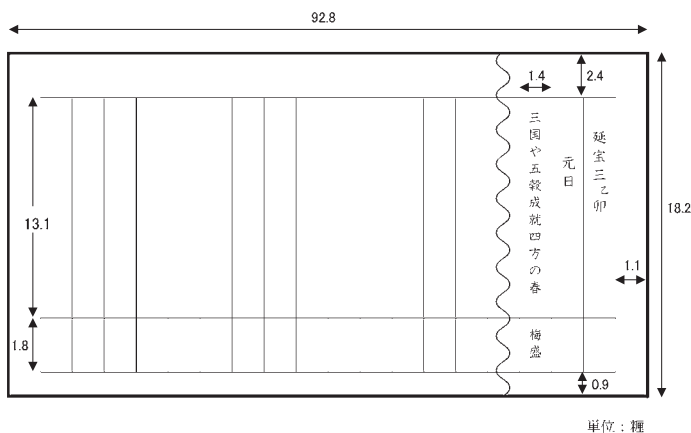
二

さて、ここに、延宝三年歳旦三物の写本がある。鳥の子紙を用いた一紙一巻、その法量は、縦一十八・二糎、横九十二・八糎である。本文は一筆で、端作「延宝三〇卯／元日」とし、料紙の表裏に一句一行書きで全八十八句の俳諧が認められている。後掲の【翻刻】に見ることく、表面の最終句は飯袋の発句、裏面冒頭句はそれを受けた貞恕の脇で、表裏は明らかに連続する。未表装のまま表面を内側にして約三・七糎幅に折り畳まれて伝来した結果、もつとも外側に来

る格好となった裏面奥の摩損はことに著しい。表裏ともに【図】に示す寸法の押界が引かれており、各句とも、句および作者名がそれぞれ境界のなかに整然と収まっていることから、丁寧にあつらえられた浄書本と見ることができるといえる。

次に、【図版1】および【翻刻】で全容を紹介する。

【図】



凡例

一、読解の便をはかるべく、異体字は通行の字体に改め、わたくしに句読点を施しつつ、原本に濁点の存する場合は当該文字の右に圈点を付してこれを区別した。

一、摩耗による不読箇所には文字数を推して□をあてた。

一、各行冒頭に一連の通し番号を付した。

延宝三乙卯

元日

- 1 延宝三乙卯
- 2 元日
- 3 三国や五穀成就四方の春 梅盛
- 4 あた、まる世や日の御恩徳 一房
- 5 山の端に巣かくるとりもかいわりて 重尚
- 6 同
- 7 餅つきの万石ぞ今日ほん俵 同
- 8 御誕生とてよるこびの春 梅盛
- 9 ほまれある家の系図はいといふに 一房
- 10 同
- 11 わらべ名や千代とよばれん年男 同
- 12 智者のほとりのしるきかど松 重尚
- 13 山家にも花ゆへ雪の窓明て 梅盛

元日

- 14 大服や老のねがひもみつ金輪 宗旦
- 15 同
- 16 む月にあそぶ鶴の孫彦 猪井
- 17 鳥台の箔はのこんの雪とみえて 復生
- 18 同
- 19 難波津を今日こそみつ物筆始 重知
- 20 むかふえ方は都の南 宗旦
- 21 諸白をす、むる春の風たちて 猪井
- 22 同
- 23 蓬萊は巴峽のさるよけふの春 復圭
- 24 ひらき豆までいはふわがくに 重知
- 25 返す田は偏に殿のめぐみにて 宗旦
- 26 同
- 27 君が代や定矩をあてし今日春 猪井
- 28 同
- 29 今日の春に相腹中や唐大和 維舟
- 30 さぞや詩歌を心むる筆 元好
- 31 朧夜の月の影ほし友にして 宗隆
- 32 同
- 33 若やくや親と子とほど今朝の春 同
- 34 小歌も酒もよきそ始 維舟
- 35 山は幕氈も豊に花見して 千受
- 36 同
- 37 寄としをのべ句いふ迄筆始 重昌
- 38 又大服をたのしめるやど 春澄

| | | | | | |
|----|------------------|----|----|-----------------|----|
| 39 | 鶯にいつも朝寝を起されて | 元好 | 64 | 山ざくら目金に遠き暮見えて | 女甫 |
| 40 | 同 | | 65 | 同 | |
| 41 | 橘や昔の京もかざりまつ | 同 | 66 | 坂東や万ざいよばふ国の春 | 同 |
| 42 | 耳よりやまづは鶯若ゑびす | 千之 | 67 | 幾世牽らん乗初のこま | 光繼 |
| 43 | 穂俵や君になびき藻千々の春 | 春澄 | 68 | 鐘の家名を得し庭の梅咲て | 貞恕 |
| 44 | ゑいさうのさうの更の御殿や年と春 | 宗甫 | 69 | 同 | |
| 45 | 試る筆まづうなづく嘉例哉 | 宗甫 | 70 | 年玉のかどをみだせる扇哉 | 光繼 |
| 46 | とをけれど海の塩風や京の春 | 宗眠 | 71 | 元日 | |
| 47 | 君がよや下々も随分今日のはる | 不尺 | 72 | のんで数の年をへぬべしとその酒 | 久宏 |
| 48 | 礼人のさかやき迄やはるの色 | 常之 | 73 | 同 | |
| 49 | 先開く暦やいははつざくら | 清印 | 74 | 日本には歌をよみ候今朝のはる | 不数 |
| 50 | 大服のいづみぞ目出た釜のにえ | 定安 | 75 | 同 | |
| 51 | 大ぶくやおいのねがひも三金輪 | 宗旦 | 76 | せんどくれたとしの礼言けふ春 | 同 |
| 52 | 難波津をけさこそ三物筆初 | 重知 | 77 | 同 | |
| 53 | 元日は定座なりけり年の花 | 夏夕 | 78 | 来る春に老やしり付のこまりもの | 季吟 |
| 54 | 玉ぶりく打出てみれば白木哉 | 信政 | 79 | 千代もと祝ふ屠蘇のさかづき | 正立 |
| 55 | 元日 | | 80 | よぶ節に下地は数寄者茶にあかて | 湖春 |
| 56 | 小蛤口よりしるしあけの春 | 了味 | 81 | 同 | |
| 57 | 同 | | 82 | 心程の世をへば千々よ宿の春 | 同 |
| 58 | 尺せじな竜宮よりのほん俵 | 貞恕 | 83 | 百間口もたてんかどまつ | 季吟 |
| 59 | 見ぬ島までも飜る伊勢海老 | 玄甫 | 84 | 市町も盛りの藤の棚見えて | 可全 |
| 60 | 舅殿鶯さそふ客待て | 光繼 | 85 | 同 | |
| 61 | 同 | | 86 | うら白や餅の鏡の雪となみ | 同 |
| 62 | 初鳥や嘉幸と告て四方の春 | 飯袋 | 87 | おとす具足も花のこざくら | 湖春 |
| 63 | 霞も横にひんがしの雲 | 貞恕 | 88 | さしものに短冊なびく東風吹て | 季吟 |

江州關所上由氏
島氏上才

| | | | |
|-----|------------------|----|--|
| 89 | 歳旦 | | |
| 90 | おさまると言も手ぞつく御代春 | 正立 | |
| 91 | ふしかへて去年もしほりや謡初 | 友静 | |
| 92 | 元日 | | |
| 93 | 門「松請」礼「者」 | 近源 | |
| 94 | 拵へ置し山の蓬菜 | 元翁 | |
| 95 | 四海波諷出しから長閑にて | 水工 | |
| 96 | 同 | | |
| 97 | 春たくといふばかりにや庭窻 | 桐天 | |
| 98 | 笑「井」包「井開」 | 近源 | |
| 99 | 雪残思「数」寄 | 元翁 | |
| 100 | 同 | | |
| 101 | 鯛年「神」鰐口 | 水工 | |
| 102 | 四手をきりかけかざるしめ縄 | 桐天 | |
| 103 | 梅にはふ宿の隣をぬしづけて | 近源 | |
| 104 | 同 | | |
| 105 | 年「珠如」扇「屋」 | 元翁 | |
| 106 | 元日 | | |
| 107 | 年とるやとんで古僕の花の春 | 西武 | |
| 108 | 明てわつさり鶯の声 | 宗友 | |
| 109 | 張たてし的をかすまはずはたと射て | 正長 | |
| 110 | 同 | | |
| 111 | もしやなをも田を植よさあ化想文 | 同 | |
| 112 | あふ夜ほど、きすずに鶏旦 | 西武 | |
| 113 | 枕かる日も永くの海道に | 宗友 | |

| | | | |
|-----|-------------------------------|-----|--|
| 114 | 同 | | |
| 115 | さは姫をめすや若君太郎月 | 同 | |
| 116 | 御湯殿はじめ常磐木の陰 | 正長 | |
| 117 | 鞠すぐる花□□□□ ^{摩損} て | 西武 | |
| 118 | 歳暮 | | |
| 119 | 年たかき私市ぞめいたく老の□□ ^{摩損} | 同 | |
| 120 | 同 | | |
| 121 | 年の矢に虎や逃る、夕間暮 | 「表」 | |

三

右に翻刻した延宝三年歳旦書付を延宝三年板『俳諧三ッ物揃』翻刻と照合したところ、前者に所収の八十八句のうち八十七句までを後者に求めることができた。延宝三年板『俳諧三ッ物揃』は二十二丁から成る横本一冊で、各丁裏の奥に「寺町通二条上ル町庄兵衛板」等、井筒屋板であることを明示した刊記がある。【表1】は、延宝三年書付と延宝三年板『俳諧三ッ物揃』との対応関係を一覧したもので、これに就けば、延宝三年歳旦書付が、『俳諧三ッ物揃』の四丁半分に相当することが了解されよう。すなわち、延宝三年歳旦書付は、『俳諧三ッ物揃』の三丁表裏・一丁表裏・七丁表裏・五丁表裏および二丁表の内容とはほぼ一致するのである。『俳諧三ッ物揃』との対照によって、延宝三年歳旦書付は五つのブロックから成ることがうかがいあがるわけだが、以下、この五つのブロックを、便宜上、【A】～【E】の記号で呼ぶこととしたい。

【表2】は、書付と『俳諧三ッ物揃』の本文異同表である。

【表1】

| E | | D | | C | | B | | A | | |
|-----------------|-----------------|----------------|---------------|---------------|----------------|---------------|--------------|----|-------------|----|
| 120 ～ 121 | 106 ～ 119 | 92 ～ 105 | 77 ～ 91 | 55 ～ 76 | 28 ～ 54 | 14 ～ 27 | 1 ～ 13 | 書付 | 『俳諧三ツ物揃』該当丁 | |
| (なし) | 2丁表 | 5丁裏 | 5丁表 | 7丁表裏 | 1丁表裏 | 3丁裏 | 3丁表 | | | 内容 |
| (引付発句) | 西武三物三組・引付発句一句 | 近源三物三組・引付発句一句 | 季吟三物三組・引付発句二句 | 貞恕三物三組・引付発句四句 | 維舟三物三組・引付発句十四句 | 宗旦三物三組・引付発句一句 | 梅盛三物三組 | | | |

【表2】

| B | | | | | | | A | | | | | |
|--------------|---------------|--------|----|------|---------|--------------|------|----|----|-------|---------|----------|
| 54後 | 44 | 37 | 35 | 34 | 28 | 27後 | 27 | 26 | 17 | 9 | 5 | 行 |
| (なし) | ゑいさうのさうの更の御殿や | のべ句いふ迄 | 千受 | よきそ始 | 同 | (なし) | 今日春 | 同 | 復生 | いといふに | 巢かくるとりも | 書付 |
| 寺町通二条上ル町庄兵衛板 | ゑいさらの更の御殿や | のべ句いふ也 | 千之 | よきそ始 | 延宝三年／元日 | 寺町通二条上ル町庄兵衛板 | けふの春 | 元日 | 復圭 | いとゆふに | 巢かゝるとりも | 『俳諧三ツ物揃』 |

| E | | D | | | | | C | | | | | | | | | | | |
|--------------|------|--------------------------------|--------------------|-----------|--------|------|-----------------------------|---------------------------------|-------|---|-----------|----|------|-----------------------------|---------------------------------|------|----|-----------|
| 121 | 120 | 119 | 117 | 115 | 111 | 107 | 106 | 105後 | 103 | 98 | 97 102 | 92 | 90 | 77 | 76後 | 76 | 74 | 55 |
| 年の矢に虎や逃る、夕間暮 | 同 | 私布ぞめいたく老の <small>（重）</small> □ | 花□□□□□ □□□□□□□□ | さほ姫をめすや若君 | もしやなをも | 年とるや | 元日 | (なし) | ぬしづけて | 笑 <small>（笑）</small> 并 <small>（并）</small> 包 <small>（包）</small> 井開 | 桐天 | 元日 | 御代春 | 同 | (なし) | けふの春 | 不数 | 元日 |
| (なし) | (なし) | 和布ぞめいわく老のくれ | 花の都はさ、めきて | さは姫や若君をめす | ことしや猶も | 年とりや | 延宝三 <small>（明）</small> 年／元日 | 寺町通二条上 <small>（上）</small> 町庄兵衛板 | ぬしづきて | 笑 <small>（笑）</small> 并 <small>（并）</small> 包 <small>（包）</small> 井開 | 桐天 | 元日 | 御代の春 | 延宝三 <small>（明）</small> 年／元日 | 寺町通二条上 <small>（上）</small> 町庄兵衛板 | けふの春 | 不放 | 延宝三乙卯年／元日 |

延宝三年歳旦書付は、27「今日春」・76「けふ春」・90「御代春」の要領で、助詞「の」を省略する傾向にあるが、かかる統一の措置ばかりでなく、本来34「よきそ始（良き着衣始め）」とあるべきところ、「き」の一字を脱した「よきそ始」、囃子言葉「ゑいさら」を「ゑい

さう」と誤ったうえ、「衍字を含んで字余り句となつた44「ゑいさうのさうの更の御殿や」など、明らかな誤写による意味不通箇所を含んでいる。作者名35「千受」は重頼門望月氏「千之」の誤写に疑いなく、注5、引付の42では「千之」と正しく書き写すなど一貫性を欠くところがある。書付の筆写者は、あるいは、俳諧や俳壇に精通した人ではなかつたのかも知れない。いっぽうで、5は刷物「菓か、るとりも」より、書付の「菓かくるとりも」のほうが本来あるべき本文であろう。また、74「不教」なる引付発句作者は、万治三年正月序刊『新続大筑波集』および寛文七年十月刊『続山井』に近江の人として入集する人物と同一人と思われる。もつとも、574については翻字ミスの可能性も考えられ、『俳諧三ツ物揃』の原本調査に及び得ない現在、本文の優位性を軽々に論ずるわけにはゆかない。総合的に判断して、右に抽出した問題句の含まれる[A]、[B]の各ブロックについては、少なくとも、書付が刷物に先立つとは言えず、むしろ、書付は刷物をもとに作製された写本であることを示唆するかのようなのである。

いっぽう、[E]ブロックは最も異同が多く、摩耗の甚だしきともあいまつて、一見、書付本文の劣性を証するかに思われるが、この部分にあえてこだわってみたい。そこで、いま、15句に注目する。書付の「さは姫をめすや若君太郎月」句と、刷物の「さは姫や若君をめす太郎月」句との異同には、これまでの事例とは異なり、誤写ではかたづけられない問題が含まれていよう。一句の趣向は、正月の異名「太郎月」の「太郎」に長男の意味を言い立てつつこれを春の女神佐保姫と取り合わせ、立春と新年の関係性を男女の関係に見立てたところにあると思しい。注6。書付句の主体は「若君」、刷物句の

主体は「さほ姫」であつて、両句はそれぞれ成り立ち得るものの、延宝三年の立春日は正月十三日であつたから、若君の太郎（正月）が佐保姫（立春）を呼び寄せるといふ書付の句形のほうが当年の歳旦としてふさわしかろう。いずれにせよ、15句に限つては、書付の句形を刷物の書き誤りに発するものとは見なしがたいのである。

なお重要な異同は、書付末尾の121「年の矢に虎や逃る、夕間暮」句が『俳諧三ツ物揃』には見えないことである。121句は、寅年の暮れを、虎が、狩矢ならぬ「年の矢」から逃れる姿と戯画化した延宝二年の歳暮句である。作者名の部分は文字が書かれていたかどうかさえわからないほど摩滅してはいるものの、書付において121句は紛れもなく[E]ブロックの一部を構成する西武歳旦中の一句である。これに対して、『俳諧三ツ物揃』における[E]ブロックは、119の西武歳暮句で二丁表が終わり、続く二丁裏には、随流門三物三組および随流の歳暮句「いつの間にとらうそつるて年の暮」が載る。そして奥に「寺町通二条上ル町庄兵衛」の刊記がある。

以上の諸徴証から、書付の[B]西武歳旦は、刷物から書き写されたものではないと断ずることができる。このことは、延宝三年時の俳諧歳旦がいまだ刷物に一本化されてはならず、書付としても流布していた事実をよく物語るだろう。拙稿「歳旦書付から歳旦帖へ」近世初期の歳旦をめぐる⁷で考証したように、寛文期までの歳旦はもっぱら書付として流通していたのであり、延宝初年も刷物への移行期としてとらえるのが妥当と考える。延宝四年歳旦も三年と似たような状況ではなかつたらうか。延宝四年正月十三日付の下里知足宛書簡^{注7}には、次のような文言が見える。

右之外、京中作者歳旦、三四枚程も有之候。他所へかし置被申

候由にて、帰次第写し可進候や。併すり本に候間、其許にても御覧可有候。

在京の人と想定される発信者は、延宝四年の季吟門・梅盛門の歳旦三物と引付歳旦発句を懐紙一枚半にわたって速報したあと、京都宗匠の歳旦がさらに「三四枚程」あって「他所へかし」ているから、戻り次第に書写して続報しましょうか、という。もつともそれらは「すり本」であるから、知足の住む尾州鳴海でもご覧になれましょう、とも述べる。これは、歳旦を「すり本」ではないかたちで、つまりは書写によつて享受することのほうがむしろ常態であった、当時の状況をうかがわせる発言ではなかったらうか。延宝三年歳旦書付が清書本でありながら多くの誤写を含むのは、教度の転写が重ねられた結果であることを想像させ、歳旦享受のあり方の一端をうかがわせているようにも思われる。

四

次に、延宝三年歳旦書付の構成を概観する。[A]ブロック前半¹、13は、京都の高瀬梅盛門の歳旦三物である。重尚は梅盛門の小山氏、寛文―延宝期における梅盛歳旦の常連である^{注8}。一房は前掲延宝四年正月十三日付書簡中の梅盛歳旦にも引付発句一句を寄せた。[A]ブロック後半¹⁴、27は、池田宗且門の歳旦三物である。宗且はもと京都の人で維舟門、延宝二年春以来、摂州伊丹に移住したとされる^{注9}。猪井・復圭の両名は延宝三年歳旦以外には見出せない作者であるが、伊丹の人と見るのが妥当であろう。

[B]ブロック前半²⁸、39は、京都の松江維舟門の歳旦三物である。

元好は広野氏^{注10}、宗隆は中井氏^{注11}、千之は望月氏、重昌は福井氏^{注12}、春澄は青木氏、いずれも維舟門の俳諧作者で、寛文―延宝期の維舟歳旦にしばしばその名を見る。[B]ブロック後半⁴⁰、54は、維舟門人の歳旦発句を列挙した引付である。うち、元好（金貞・千之・春澄・宗甫・常之・宗且・夏夕の七名は、寛文十三年の維舟歳旦引付にも見える^{注13}。なお、51宗且句は実は[A]ブロック後半¹⁵に既出で、宗且みずから京都の維舟に報じた歳旦が、維舟歳旦の引付として採られたのだろう。

[C]ブロックは、三物ではなく発句から始まる異例の形式をとる。56の作者了味は、寛文十一年三月刊『落花集』以下の俳書に入集する京都の人で、宮川氏。57、68は乾貞恕門の歳旦三物である。貞恕の本貫は越前敦賀で、上京して貞室門の有力俳家として活躍したことで知られるが、明暦―万治頃、大津にいたこともあったらしい^{注14}。玄甫は、延宝二年三月刊『短綆集』に^{注15}「玄甫」として入集する人物と同一人か。光継は、明暦二年八月刊『玉海集』以下の俳書に入集する江州大津住の福田氏と目される。飯袋は、明暦四年三月跋刊『鸚鵡集』・寛文三年十月刊『早梅集』・同十二年七月刊『大海集』に草津の住人として入集する^{注16}。「重道」の別号か、さもなければその親に当たる人物であろう。引付発句作者74「不教」の肩書にも「江州膳所上田氏」とあり、57、76は総じて江州貞恕門の歳旦と推定される。

[D]ブロック前半の77、91は北村季吟家の歳旦三物および引付であること明白で、贅言は要すまい。[D]ブロック後半⁹²、105は漢和・和漢の三物と引付である。近源については、延宝二年五月刊『如意宝珠』に入集する望月（天原）千之の肩書^{注17}「千之」が手がかりとなり、

維舟門望月千之の別号、もしくは千之の親と推測される。兀翁は宗旦の伊丹移住後の別号とされる^{註15}。水工・桐天（桐夫）については未詳。

〔E〕プロック106〜117は京都の山本西武門の歳旦三物であり、118〜121はその引付の歳暮発句である。宗友は山口氏、正長は青木氏として、延宝二年五月奥刊『大井川集』に「京之住」として入集する人物か。

以上の考証の結果、延宝三年歳旦書付が、京俳壇を中心としつつも、伊丹や大津という地方俳壇の歳旦まで収めていることが確認された。曼殊院蔵『俳諧三ツ物揃』の場合、各丁巻頭に延宝三年歳旦であることが明記されていたが、書付では巻頭に「延宝三之卯／元日」とあるのみである。さらに維舟歳旦冒頭の28、季吟歳旦冒頭の77にあつては、「元日」という前書も「同」の字で代えられることによつて、あたかも直前の宗旦歳旦や貞愨歳旦と連続するかのごとく、書付は、どこからどこまでがどの地域の、どの宗匠の歳旦であるかがはつきりしない。書付における境目の見えにくさは、書付筆者の杜撰が原因なのだろうか。否、かかる連続性こそ、他門や他地域の歳旦も広く書き写して交換しあつていた、近世初期の歳旦享受の姿勢に基づくものであつたと考える。翻つて『俳諧三ツ物揃』に目を転じれば、〔A〕プロックにおける梅盛歳旦と宗旦歳旦、〔B〕プロックにおける季吟歳旦と近源歳旦は、同じ丁の表裏に配されることによつて、あたかも一連の歳旦であるかのとき錯覚をわれわれに与える。しかしながら、これらは本来別々に発注された歳旦であつたのを、井筒屋において同一丁の表裏に刷り立てたものではなかつたらうか。先述のように、『俳諧三ツ物揃』では西武歳旦の丁の裏に随流歳旦が刻されているにもかかわらず、書付は随流歳旦をまるごと

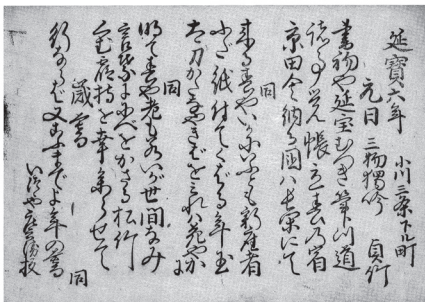
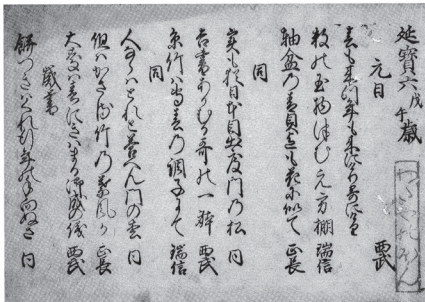
と欠くという現象も、西武歳旦と随流歳旦が本来別物であつたという事実を示しているよう。

また、〔図版2〕は、天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵『延宝六年俳諧三ツ物揃』一丁表裏の影印^{註16}である。表は西武歳旦、裏は貞竹歳旦、板下筆跡の相違は一目瞭然である。延宝期にはかくのごとく、刷物の表裏に別種の歳旦を刻することもあつたのである。

【図版2】

『延宝六年歳旦三ツ物揃』一丁表

同一丁裏



些末な問題に拘泥してここに至ったが、これまでわれわれは知らず知らずのうちに、近世後期の歳旦帖の姿を通して、草創期の歳旦を眺めすぎてきたきらいはなかったか。そして、そのことによつて、歳旦という営みを俳壇経営上の問題に偏向して語る弊を招くこととはなかったか。例えば、佐藤勝明「井狩友静」^{〔注17〕}は、「延宝期前半までの歳旦資料」は「各宗匠の歳旦帖に他門の句が混じることとは決してなく、自由な交流の痕跡をうかがうことはできない」と指摘する。「歳旦帖は自派の布陣・作風を公に示すものという意識が、俳壇（少なくとも季吟・梅盛らの周辺）では暗黙裡に共有されて」おり、「知足が情報の入手に尽力して歳旦書留を作るのも、後年の芭蕉が書簡でしばしば歳旦吟を話題にするのも、各門流のありようを象徴するものとして、歳旦帖を重視する風潮が俳壇全体に存していたからにはかならない」ともいう。だが、自派の勢力や作風を誇示することが、歳旦の本質なのだろうか。少なくとも草創期にあつて、歳旦は、書付であれ刷物であれ、むしろ自由で開放的な年賀の配り物であつた。本稿では、延宝三年歳旦という既知の資料をとりあげ、書付と刷物という媒体の違いに着目することで、歳旦の原点にたち返ることを目指してきた。最後に、元來は祝儀物であつたはずの歳旦が、なぜ、門派意識の象徴となつていったのか、粗削りながら私見を述べておきたい。

そもそも、元日に発句を詠むならわしは、室町中期、和歌・漢詩の試筆に付加することに始まり、室町後期に至つて恒例化したとされているが^{〔注18〕}、俳諧の歳旦に言及した最初期の資料として、貞徳

伝書『天水抄』に次のような記事がある^{〔注19〕}。

元日三物、発句・脇・第三・作者の名付・発句置所、口伝有。右切紙のごとく、去嫌ひも右に同じ。元日雪か雨の時は、押なべて其句体也。又、けふの春・今朝の春、毎度の義也。脇・第三、心得有者也。

連歌は其家の風つぎ来り、直人もてはやされ、三つ物し侍る。俳諧なればとて、さもなきともがら、発句・脇・第三相伝をもうけず、おしずいにて家々門々に三つ物とやらん書写しもあそび侍事、連歌の師たる人さこそかたはらいたかんめるべけれ。俳諧も門人多く有、相伝を得たるはよろしかんなん。さにあらずはかへつて天命につき 天満神の御加護にもはづれなんこそ、あなや〜。又はわたくしの家の吉例にて祝義ならば、年徳の棚よりいさ、かもらさず、朝な夕な是をぬかづきなば、寿福いやましなるべし。

右の文章は、俳諧作者たちが、連歌師をまねて三物を賦しては「書写してもあそ」んでいた近世初頭の様相をよく伝えている。『天水抄』は、相伝も得ず連歌の表面的な模倣に過ぎない俳諧歳旦を、「かへつて天命につき」「天満神の御加護にもはづれ」る行為として戒めつつ、私的な吉例行事としての歳旦は、歳徳神に供えて他に漏らさぬよう促している。歳旦は、かくのごとく、神前奉納を本義とする営みであつた。神明への捧げ物であつたからこそ、そのお下がりとしての歳旦書付には深い祝儀性が宿ると同時に、本来、誰に対しても開かれた配り物であつたはずである。

また、『天水抄』が「元日雪か雨の時は、押しなべて其句体也。けふの春・今朝の春、毎度の義」と述べるように、歳旦発句は特に

修辭的で、型どおりの詠みぶりをもつぱらとした。『滑稽太平記』卷之七「歳旦等類の事」は^{〔註〕}、江戸の蝶々子による明暦三丁酉年の歳旦発句「日のもとや秋津洲立の酉の春」が、京都の則常による歳旦発句「春はけふ秋津洲立ぞ酉の年」と明らかな等類句であったという逸話を伝えている。『滑稽太平記』はこの話を「正しき等類也といへども、境隔たるによつて、意根もなしと也」と結ぶけれども、例えば「酉年」を主題として機知を働かせた結果、同想同意の句が出来するのは大いにあり得た事態であつたらう。『歳旦発句集』卷末「歳旦発句集の大意」において、井筒屋庄兵衛が「発句のすがた、等類をさのみにえらまねば、書加る書林の巧者もいらす」と記したとおり^{〔註〕}、歳旦発句において、等類に対する配慮はほとんど必要がなかつたのである。

かかる類型性と大きく矛盾するようだが、歳旦句にはいっぽうで、自己を述べる器としての機能もあつたと思しい。延宝三年歳旦書付を例にとるなら、15「大服や老のねがひもみつ金輪」が初老を迎えた宗旦^{〔註〕}の感懐を主題とし、72「のんで数の年をへぬべしとその酒」が十二歳の少年の長寿への願いを主題とすることく、ひとつ年を重ねたという現実を受けて、作者の述懐が歳旦発句に託される場合も少なくない。これは、虚構に基づく俳諧の世界にあつて特異な性質と言わねばならない。

宗因は、延宝八年の元日、「世上誹諧風躰かはれるを見給ひて」、「そよやそよ昨日の風躰一夜の春」との歳旦発句を詠んだという（延宝八年二月刊『破邪顯正返答』）。この句は同年八月跋刊『阿蘭陀丸二番船』の巻頭にも据えられて流布し、談林末期における俳風の激しい変転の象徴と理解されてきたが^{〔註〕}、歳旦句の特性に照らせば、

七十六歳の春を迎えた宗因が、世上の俳風の激変を我が身の上に置いて抱いた感慨こそ、一句の主題ということになる。高政が「俳諧惣本寺」を初めて標榜したのは延宝六年歳旦帖であり（綿屋文庫蔵「延宝六年俳諧三ッ物揃」）、惟中が「西山梅翁跡目」を僭称したのも延宝八年歳旦帖であつた（延宝八年三月奥刊『破邪顯正返答之評判』）。これらの事例は、自己を述べる歳旦という営みを巧みに利用した、俳壇新規参入組の戦略だつたのではあるまいか。

宗匠の門派意識が先にあり、歳旦があらかじめその反映の場として用意されていたのではなく、歳旦帖もはじめから一門一家の偉容を誇るための具であつたわけではない。歳旦が本来的に有していた祝儀物としての開放性や、年頭を伝える述懐性が、井筒屋の登場によつて刷物となり、やがて定期刊行物と化したとき、歳旦帖は、宗匠の立場や句風を最もわかりやすく、かつ先鋭的に体現することも可能なひとつのメディアとなつた。そして、歳旦帖のメディアとしての成長がかえつて、都鄙の宗匠を刺激し、門流意識を育んでいった側面も看過できぬように思われる。

(注1) 『連歌俳諧研究』第五十三号、昭和五十二年八月。

(注2) 『連歌俳諧研究』第五十六号、昭和五十四年一月。

(注3) 『俳書の話』(平成元年、青裳堂書店) 所収。

(注4) 『俳文学報 会報』大版俳文学研究 第六号 第四十八号、平成二十六年十一月。

(注5) 佐藤勝明「望月千之・千春」(芭蕉と京都俳壇―蕉風胎動の延宝・天和期を考える―、平成十八年、八木書店) 参照。

(注6) 延宝三年板『俳諧三ツ物揃』九丁裏の義治句「さほ姫のつれあひなれや太郎月」も同想である。

(注7) 森川昭「鳴海眺望歌仙草稿と延宝四年歳旦掲載書状」(『連歌俳諧研究』第三十五号、昭和四十三年九月) 参照。なお、引用にあたっては、読解の便を重視し、わたくしに句読点を補い、片仮名を平仮名に改めた。

(注8) 佐藤勝明「小山重尚」(芭蕉と京都俳壇―蕉風胎動の延宝・天和期を考える―) 参照。

(注9) 安田厚子「池田宗旦年譜稿」(鳥居清編『俳諧攷』、昭和五十一年、俳諧攷刊行会) 参照。

(注10) 『寛文比評諸名譽人』に「広野四郎左衛門維舟三書連 兼金貨後名連 元好」とある。

(注11) 維舟批点の寛文三年六月十日興行「何舞」俳諧独吟百韻に「宗隆」(寛文十二年三月奥刊『時勢粧』)と見え、寛文四年九月刊『佐夜中山集』にも「宗隆」として入集する。『知足書留歳旦帖』寛文三年条には「宗隆」として載る。相模の勲左五郎

(注12) 寛文二年正月刊『伊勢正直集』句引に「京之住」「重昌」福井として入集するほか、維舟撰書を中心とした正保―延宝期の俳書に入集する。

(注13) 柿衛文庫蔵『寛文十三年歳旦集』による。

(注14) 朝倉治彦「乾貞恕年譜」(『貞門俳論集 下』) 所収、昭和三十三年、古典文庫) 参照。

(注15) (注9) 所掲稿参照。

(注16) 図版は天理図書館綿屋文庫俳書集成第七卷『俳諧歳旦集 一』(平成七年、八木書店) 所収の影印より転載した。

(注17) 『芭蕉と京都俳壇―蕉風胎動の延宝・天和期を考える―』所収、(注5) 参照。

(注18) 鳥津忠夫「連歌と年中行事」(鳥津忠夫著作集 第六卷 天満宮連歌史、平成十七年、和泉書院) 参照。

(注19) 古典俳文学大系『貞門俳諧集 二』(昭和四十六年、集英社) 所収の翻刻本文によりつつ、読解の便宜上、一部わたくしに句読点を補った。

(注20) 引用は古典俳文学大系『貞門俳諧集 二』による。

(注21) 引用は古典俳文学大系『貞門俳諧集 二』による。

(注22) (注9) 所掲稿参照。

(注23) 今栄蔵「談林俳諧史」(『初期俳諧から芭蕉時代へ』、平成十四年、笠間書院) 等参照。

付記 資料の存在についてご教示くださった加藤定彦先生に深謝申しあげます。

(おぎのや・ちか)